なお、編集学習については述べ度い事も多いが、それは別の機会にゆずる事とする。

豊後風土記中の大分郡の酒水について

二宮好雄
（別府市青山小学校教官）

豊後風土記■大分郡の項に酒水がある。

酒水在郡西

此水之源、出郡西柏野之磐中、指南下流、其色如水味小酸、焉用療痂癬、

とある。この川は現在挾間町埴坪、海老毛を通つて向の原東方で大分川に合流する黒川にあたるものと思われる。

この川の全流域にわたつて、しみでるところがあるらしいが、現在大きな泉は三カ所で、第一は向の原から上市に通ずる橋下のもので、温泉に利用されている。

第二は、北方部落西南の黒川と初瀬井路の交叉点で、黒川の隧道の中である。

第三は向の原から約二粁黒川をさかのぼつた海老毛部落はずれの谷間で湧出口は二カ所になつており上流のが量も多いいずれも炭酸泉である。風土記中の酒水はこの海老毛のものを指しているものと思われる。（五万分の一地図では礦泉の記号で示されている）

一時礦泉として販売されたと伝えられ、川端の出口は土管を当ててあり、附近の水中は黄褐色の沈でん物でおおわれている。

この放出口から五米ほど離れた竹藪の中に、幅約二米、長さ約六米、深さ約二米で片側に段のついた水槽が石垣をもつて強固に築かれてあり、かつては、この水槽の上に上屋があつたらしく、槽の中や附近に瓦の破片が多数見られる。冷泉として水浴されていたのであろう。現在は川底が掘れ下つたためであろうか、水槽の下を流れているらしく空である。

なお、酒水について「其色如水味小酸」とあるのは、古くは酒はドブロクで白濁しており、雑菌の作用で酸味が強かつたのであろうと思われ、そのために「其色如水味小酸」としたものであろう。酒水の「水」は酒の水と解するよりも、酒の川と解するのが正しいのではなかろうか、どなたかに御教示を得たい。